

老老介護における余暇時間の獲得方法の変遷

11310089 将積由花

目次

- I. はじめに
 - 1. 問題の所在と既存研究
 - 2. 研究目的
- II. 研究方法と調査地概要
 - 1. 研究方法
 - 2. 調査地概要
- III. 調査結果
 - 1. Aさんの事例
 - 2. Bさんの事例
 - 3. Cさんの事例
- IV. 考察
- V. おわりに

I. はじめに

1. 問題の所在と既存研究

○郊外住宅団地における問題点

居住者の高齢化、子ども世代の流出

→退職後の居住者の孤立、空き家の発生など

その一方で…

高齢夫婦世帯が増えることは介護を行う場合、同時期に住
宅団地では多くの世帯で老老介護を行う可能性も…

○老老介護による問題

介護負担によって介護者が肉体的・精神的に疲労してしまいうつ状態になることも

<対策>

上村ほか(2006):介護負担感の原因として趣味活動や社会関係を育む余暇時間の減少を挙げ、余暇時間の確保を介護者支援の一つとして求めた

羽生(2010):家族や親しい友人との会話や趣味活動で介護負担感を緩和するため、介護時間を短縮するサポートをする必要性を説いた

→介護によって余暇時間が制約されている中で孤立しやすい住宅団地の高齢者はいかに余暇時間を確保し活用して生活の質を維持しているのだろうか？

山田ほか(1994):短期入居生活介護を利用することで余暇時間として自由に趣味活動をおこなうものがいたことを述べた
多田ほか(1987)など:デイサービス利用することで利用時間に余暇時間がもてたという結果を示した
→余暇時間は施設利用をおこなうことで獲得されているとしている
しかし各自の施設を対象としての研究はみられるが介護者の介護生活を対象としたものはない

今村(2015):介護者の主観的負担に着目介護者の取り巻く環境、介護生活の経時的変化を追った

小池(2015):介護生活を送る中で介護者がどのように介護不安や苦悩を受け止め対処しているか調査した

介護者が介護を行ううちに介護負担が増え余暇活動を得るのが難しくなっていく、介護生活全体を通して介護者の余暇活動の獲得方法を検討していくべきでは

2. 研究目的

老老介護において介護者がどのように余暇時間を確保しているのか介護経過による変化を介護者の介護環境、施設利用といったサポートに着目して聞き取り調査をおこなう

II. 研究方法と調査地概要

1. 研究方法

○聞き取り調査

調査内容：介護全体の流れからどのように余暇時間を確保していたのか検討するため介護経過と具体的な余暇活動とその変動について時系列順に聞き取りをおこなった

2. 調査地概要

・昭和41年から開発された愛知県安城市の北端部に位置する戸建て住宅団地

・当時としては珍しくガス・電気・水道が完備されていた団地であるため収入のある世帯が購入・入居した

高齢化率：38.9%

高齢者の一人ぐらい世帯率：34.6%

→共に全国平均より高いため老老介護をおこなった高齢者が多いとも考えられる



III. 調査結果

1. 聞き取りの対象者

	性別	年齢	要介護者病名	介護期間
A	女性	74	パーキンソン病	5年間
B	女性	83	パーキンソン病	5年間
C	女性	85	パーキンソン病症候群	4年間

1.Aさんの事例

介護1～3年目(58歳～61歳)：夫の症状が軽度

パート勤務、趣味活動しながら介護

介護4年目(62歳)：夫が眠らなくなる、勝手に行動する

・処方された薬が効果を発揮し夫の様態は安定

趣味活動を継続できたため話したり踊ったりして精神的に立ち直れた

介護5年目(63歳)：夫が精神的におかしくなる

・処方された薬も効かなくなってくる

週3のデイサービスの時間に近隣に住む友人が愚痴につきあってくれた

夫が寝ている間に日課である犬の散歩をおこない気分転換をした

2.Bさんの事例

介護1年目(69歳)：夫を見張っていないといけない状態

なれない介護に戸惑い相談をすることもなかったためかなり追い込まれていた

介護2年目(70歳)：夫の症状がさらに悪化し入院

介護に追い込まれることも無く精神面は大幅に改善された

介護3年目～(71歳～)：在宅介護に戻った夫は精神的に不安定に

一日中家にいてどこにも出られなくなったがBさんの趣味は自宅でできるものばかりであったため夫が寝ている間をはじめとしたちょっとした時間で気分転換をおこなった

3.Cさんの事例

介護1～3年目(78～80歳)：夫の病状は軽度

趣味活動を行っており自宅と隣家での短歌会や茶道会による交流が楽しかった

介護4年目前期(81歳)：夫が別の病気で入院

親交のある近隣住民が週2で病室に来て話し相手になってくれた病室でもできる趣味活動を夫の寝ている間に行き気持を整えていた

介護4年目後期(81歳)：夫が肺炎を繰り返し発症

日増しに弱っていく夫を見て生きた心地がしなくなっていった見舞いに来た趣味仲間が心配して無理矢理Cさんを連れ出していろいろな話を聞いてくれたことが何よりの気分転換になったという

聞き取り調査結果のまとめ

- ・要介護者が軽度の間は比較的自由に介護者は余暇時間を獲得できている（A、C）
- ・要介護者の症状の変化によって余暇時間の獲得に制約が出てきた場合は
→要介護者が寝ている間や病院やデイサービスなどにもたらされた余暇時間を活用して趣味活動や友人と会話をおこなっている

IV. 考察

○介護者の介護生活の経過

→要介護者の症状の変化によって余暇時間の制約が増えていった

○余暇時間が減少した場合

余暇時間が自由に獲得できていた時のように地域でおこなう様な
多人数でおこなう趣味活動をしなくなった

→要介護者が寝る時間を余暇時間として活用しており比較的短い
時間では介護以前から続いている手軽、単独でできる趣味活動をおこなっている

→施設利用によって余暇時間を獲得しており比較的長い時間では
近隣住民や趣味仲間などある程度の人数で会話をおこなっている

V. おわりに

介護負担感の軽減に夫の就寝時間や施設利用によってもたらされた余暇時間を活用して地域住民と関わったり趣味活動を行ったりしていることがわかった

本研究では3名という少人数の聞き取り調査をおこなったため介護者一般にあてはめていうことは困難である
老老介護をおこなう介護者には様々な背景があると考えられるため今後の調査の蓄積に期待したい

参考文献

- 今村圭子 2015. 在宅介護における介護者の主観的介護負担感——質的研究方法を用いて—— 鹿児島国際大学院論集 7:44-47.
- 上村さと美 秋山純和 2006. 男性、女性在宅介護者の介護負担感の違い——Zarit介護負担感評価尺度を用いた性差による比較—— 理学療法学 33 (Supplement 2):531.
- 小池妙子 平川美和子 工藤雄行 大沼由香 寺田富二子 東谷康生 高祐子 2015. 若年性認知症者の家族介護者の受容過程 弘前医療福祉大学紀要 6(1):55-64.
- 多田敏子 熊坂延枝 中野秀子 原祥子 1978. 日本看護研究学会雑誌 9(4):4.37-4.46.
- 羽生正宗 2010. 老老介護の現状分析. 山口経済学雑誌 59, 303-341.
- 山田紀代美 鈴木みずえ 土屋 滋 1994. ショートステイ利用による介護者の疲労徴候の変化とその関連要因についての調査研究. 日本看護科学会誌 14(2):39-47.
- 安城市ホームページ「安城市の現状」より<http://www.city.anjo.aichi.jp/kurasu/kenko/sonota/documents/21anjoukeikakuandai2syoun.pdf>
- 内閣府ホームページ平成26年度白書よりhttp://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2014/zenbun/s1_2_1.html